

石神遺跡の調査（飛鳥藤原第140次）

今冬はとても寒いです。朝、調査現場に行くと土や道具が凍っていることや、横なぐりの雪に驚くこともあります。その中で調査を進めています。

さて、石神遺跡^{いしがみいせき}の継続的な発掘調査も18回目をむかえました。今回の調査区は2004年の調査区の北側で、面積は約625㎡です。周辺の過去の調査では南北方向の溝や池状の遺構^{ぐちゆう}が並び、遺構内からは具注^{ぐちゆう}磨木^{れきもつかん}筒をはじめ多くの木簡、木製品、土器等の遺物が出土しました。また、遺跡の北側を画する阿倍山田道がどこを通っているのか、ということについてもその確認が課題となっています。

年が明けて、7世紀の遺構の発掘にとりかかりました。これまでに木器、木製品、獣骨といった遺物も出土しています。しかし、まだまだ調査はこれから。今回はどのような成果があがるのでしょうか。

ところで、飛鳥といえば、不思議な石造物をはじめ、多量の石が使われた施設があります。遺構が複雑に重なり合っている状況もしばしばみられます。

今回も礫が集中している部分の下層に、溝がありました。礫を取り去らなくては、溝の調査ができません。そこで、慎重に記録を作成し、極力保存を図りつつ、調査をしていくこととなります。この記録が発掘調査に重要なものであることはいまでもありません。調査で消失、あるいは改変されてしまう遺構であればなおさらです。

調査現場では、どうしたらより多くの遺跡を考える情報を記録し、活用していけるのか、試行錯誤を続けています。一例としてデジタル写真による遺構計測の画像をお見せします。このような実験と検討の繰り返しも、発掘調査の面白さの一つです。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部 金田 明大）



デジタル記録された礫の集中(斜めから)